UNIVERSITY OF CAMBRIDGE

AET1
Asian and Middle Eastern Studies Tripos, Part IB

Thursday 26 May 2016 09.00 to 12.00

Paper J5

Modern Japanese texts 2

*Answer **both** sections.*

*Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** answer booklet.*

STATIONERY REQUIREMENTS
20 page answer booklet
Rough Work Pad

SPECIAL REQUIREMENTS TO BE SUPPLIED FOR THIS EXAMINATION
None

You may not start to read the questions printed on the subsequent pages of this question paper until instructed to do so.

SECTION A

1. Translate the following passage from an **unseen** text into English. [40 marks]

一　生活の構造とは何か

(1) ある男性の一日

「生活には構造が存在する」とはどういう意味か、とりあえず具体的な例をあげて説明しよう。ここに一人の中年男性がいる。仮にF氏とよぶ。このF氏に対象者になってもらって、彼の日常生活を観察することにする。一日中、朝起きてから夜床に就くまで、F氏に影のように付き添って彼の行動を観察する。その際、「いつ」「どこで」「誰と」「何をしたか」という四項目からなるリストをあらかじめ作っておいて、そこにF氏の行動を逐一記録しておく。一日だけでなく、次の日も、その次の日も、雨の日も風の日も、観察を続ける。そうやってしばらく観察を続けていくと、F氏の行動のパターンというものがしだいに見えてくる。たとえば、平日の朝は七時に起きるが、土曜と日曜は九時頃まで寝ているとか、昼食は同僚と会社の近くの蕎麦屋かラーメン屋でとることが多いが、給料日前になると社員食堂を利用するようになるとか、火曜と木曜は残業をすることが多く、金曜の夜は同僚と麻雀を楽しむとか、……そういったことがわかるようになる。つまりF氏の生活には「いつ」「どこで」「誰と」（一人での場合もある）「何をする」ということに関して、言い換えると、「時間」「空間」「他者」「行動」という四つの要素（変数）の組み合わせに関して一定の規則性があるということである。このことこそ「F氏の生活には構造が存在する」ということにほかならない。そしてこのことはひとりF氏の場合に限った話ではない。主婦AさんにはAさんの、大学生B君にはB君の、入院患者C氏にはC氏の、囚人二十八号には二十八号の生活の構造がある。生活の構造は人によって違う。しかし、構造が存在するという点は共通である。

床に就く	to go to bed	同僚	colleague
影	shadow	麻雀	Mahjong (game)
あらかじめ	ahead of time, in advance	要素	factor, element
蕎麦	そば	患者	a patient
逐一	in detail, thoroughly, one by one	囚人	prisoner, convict

ŌKUBO KŌJI, *Nichijō seikatsu no shakaigaku* (2008), pp. 31-32.

SECTION B

Translate **two** of the following passages from **seen** texts into English [30 marks each]

2.

(2) 視線の衝突と身体の接触の回避

規則違反が問題になるのは二番目の乗客の場合である。最初の乗客がAに座っているとする。このとき二番目の乗客はどこに座ったら「おかしな人」と思われる危険が一番小さいであろうか。それはDである。誰も座っていないときは一番人気のなかったDが、今度は一転して一番人気のある座席になる。AとDは対角線上にあるから、「距離をとって座る」という規則に一番適合的である。もう少し仔細にみるならば、Bに座ると、Aに座っている乗客と視線がぶつかりやすくなる。視線の衝突は緊張を生む。儀礼的無関心を示そうとしているときに一番避けねばならないことである。真向かいの座席に座った者同士が視線の衝突を回避しようとすると、ずっと窓の外を見ているとか、本を読んでいるとか、目を閉じているとか、絶えず気を使わなくてはならない。Cに座ると、視線の衝突は回避できるが、身体間の距離は一番近くなる。二人の乗客がAとCに並んで座り、対面のBとDが空いている状況というのは、第三者の目には、この二人は知り合いに見えるであろう。前章の家族の寝方のところで論じたように、心理的距離は空間的距離に反映されるものだからである。また、Cに座った場合に生じる別の問題として、窓外の風景を眺めようと窓の外に顔を向けると、Aに座っている人の横顔が視野に入るということがある。なぜこれが問題なのかというと、Aの乗客は自分が「見つめられている」と感じるからである。こうした誤解は横長の座席でもしばしば起こる。誰もが経験があると思うが、横長の座席に座っているときに、車内広告を読もうとして斜め上方に目を向けていると、隣に座っている人がこちらを気にしてチラリと視線を向けてく

(TURN OVER)

Question 2 continued…

ることがある。自分が「見つめられている」と誤解しているのである。こういう場合は、ひたすら車内広告を眺め続けなくてはならない。間違っても視線を合わせてはならない。そうすることで、「私は車内広告を見ているのです。あなたの横顔を見ているわけではありません」というメッセージを相手に伝えるのである。そうすれば、「そうか、私を見ているわけではないのだな」と相手も安心するであろう。

以上の考察から、「距離をおいて座る」という規則は、「視線の衝突を避ける」「身体の接触を避ける」という二つの規則から成っていることが明らかになった。最初の乗客がAに座っている場合に、二番目の乗客がDに座るのは、そこが視線の衝突と身体の接触の二つを同時に回避しやすい座席であるためである。

ŌKUBO KŌJI, *Nichijō seikatsu no shakaigaku* (2008), pp. 61-63.

3.

時間を守る

今日は春の親子遠足です。新人の小林先生は、準備の疲れでうっかり寝過ごしてしまい、決められていた職員の集合時間に数分遅れて、職員室に駆け込みました。すでに、ほかの先生方は各保育室に移動を終え、子どもたちを迎える準備をしています。チラッと冷たい視線を投げかけられ、小林先生はどうしてよいのかわかりません。

マイナスポイント

日々の保育や行事はさまざまな「柱」に支えられて成立していますが、ときにはそれらが変更される場合があります。たとえば遠足の場合、雨混じりの天気による目的地の再検討や、日時の変更、職員の体調不良による欠勤などがあげられます。ほんの数分の遅刻であっても、十分な準備や変更への適切な対応が困難になり、円滑な進行は望めませんし、対応の遅れからまわりに迷惑をかけることも出てきます。これではまわりからの信頼は揺らいできます。

アドバイス

集合時間については、「この時間ぴったりに集合」ではなく、「最低この時間までには」と認識すべきです。行事の規模や集合する目的などを考え、打ち合わせの集合時間とは別に、自分なりの「集合時間」を設定しましょう。立場が上の人ほど、早く持ち場につかなくては示しがつきません。

(TURN OVER)

Question 3 continued…

ステップアップ

運動会や遠足のような大きな行事では、決められた時間の30分前には配置につきましょう。また、園児の移動、たとえば保育室からホールに園児を誘導する場合は、5～10分前くらいを目安に保育室を出発する予定を組みます。定刻ギリギリでは、もし保護者の方の急な来訪や子どものおもらしなどがあった場合、集合時間に大きく遅れをとってしまうからです。ゆとりを持って行動し、まわりに迷惑をかけることがないように心がけてください。

ミニコラム

社会生活を送る上で守るべき多くの規範がありますが、もっとも簡単で、結果がわかりやすいものが「時間を守る」ことです。人間ですからときには遅れることもあるでしょうが、それが頻繁だと「時間さえ守れないだらしがない人」と思われてしまいます。

***

マイナスポイント

自分に身についているからこそ指導することができるのです。そして片付けられない子どもたちに疑問を持つことができ、指導すべきポイントをおさえることができるのです。きちんと片付けられず雑然とした雰囲気では、当然子どもたちもきれいにするわけはなく、結果としてクラス環境は荒れた空気へと変化していきます。さらには無造作に置かれた椅子などにぶつかり、けがをさせてしまう可能性まで含むことになります。十分に注意したい事柄です。

YATAGAI MASAAKI and UENO MICHIKO: *Kore dake wa mi ni tsuketai. Hoikusha no jōshiki 69* (2006), pp. 46-47, 69.

4.

三　家族形成期に顕在化する男女差

つづいて、女性に限定して結婚ならびに親なり（出産）についてみよう。第五章でみたように、「21世紀出生児縦断調査」からも、出産直後の母親の就業率はきわめて低いことが明らかとなっている。かつての「寿退社」の慣行はうすれ、結婚時の就業継続率は高い。しかし、親なり直後の就業率は低い。本章でみてきたように、成人期への移行過程は、戦後一貫して男性と女性とが同じように経験するという点で画一化の傾向を示してきた。女性が、高等教育へ進学するかは、個人の希望や能力に応じて決定し、さらにその後も男性と同じように、学校卒業とともに社会へと旅立っていった。「女の子だから」という意識は、本人もまた周囲の者にも希薄化しつつある。なかでも一九八六年に施行された男女雇用機会均等法は、男性と同じ条件で就労する機会を女性に保障した。総合職女性の誕生であった。まさに女性でも「がんばれば、それなりに評価される」時代が到来したかのようにみえる。

しかし、親なりに関しては、相反する規範を周囲もまた女性本人も強く抱き続けてきた。すなわち「子どもは、母親が責任をもって育てるのがよい」という規範である。その結果、家族形成期になって初めて女性は、男女差の存在を認識するので

(TURN OVER)

Question 4 continued…

ある。この点を、第五章で紹介した「からだ・こころ・つながりの発達研究」で確認しておくと、図21のように、一九九一・九二・九三年に首都圏の四年制大学を卒業した女性のうち、ほとんどが親なり期には仕事を辞めている。親なり期に就業しているか否かを統計的に有意に推測する因子は、在学中に示された「結婚後に共働きする」という希望と、学生時代までの親の共働き経験の二つであった。人間行為力で考えるならば、継続を希望していた女性は親なり後も継続できる仕事や、配偶者を計画的に選択したのかもしれない。興味深いことに、男性の場合には、男性本人の希望や経験は、結婚後の共働きとはいずれも有意には関連していなかった。つまり、結婚後の夫婦の就業形態は、妻である女性の選択によっているということだ。

SHIMAZAKI Naoko: *Raifukōsu no shakaigaku* (2008), pp. 85-87.

END OF PAPER